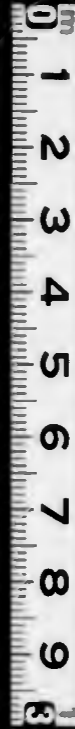


北
藩
鑑

伊 市 稻
丹 橋 垣

五
十
三



内閣文庫	
番 號	和 34682
冊 數	278 (54)
函 號	159 1

内閣文庫	
三五九一ノ察	二八冊
三四六八二號	和書

和書

藩鑑卷之七十六目錄

い部二十九

稻垣平右衛門源長茂

同 撰津守源重綱

市橋中総守友原長勝



藩鑑卷之七十六

稻垣

平右衛門源長茂なかの平右衛門重宗むねむね
の長男ありはしめ若助とあり
牧野右馬允成定なりの寓いり一永禄
八年より

東照宮の古麾下ふるもとの属しゆ一たてま

つゝ天正十八年関東侵入國のと
き上野國園村上野國新川桐原
よをりて采地二千石を賜ひ慶
長六年采地を賜りて上野國
伊勢灣一萬石を賜りて同十七
年十月廿二日七十四歳よりて
死せり

一 永祿五年六月今川氏志宝版郡

牛窪の牧野右馬允成定同出羽成
清を以て富永城を守らむ
神君顯りて攻給へとも城強く
成定は長福垣平右衛門長茂功あ
里氏志感状を授く 武徳編年集所

一 永祿五年九月廿九日三羽八幡合
戦より首一級を得たりけり今
川氏志書も牧野右馬允成定より

贈りて長茂の軍功を双なりといよ
〜勇ましくけりす〜といふ

寛永譜

一 永祿七年四月寶飯郡牛窪の地よ
の牧野右馬允成定同出羽も清成同
八太史定成同民部成行等今川方
と〜て城を築き割拠す〜如よ
成定は右稻垣平右衛門長茂弱年

ありといふとも思ふ深〜武畧よ
長守頼よ成定をす〜酒井忠次
石川數正よ撮て
神君よ降をとく〜ゆ〜は存容あ
里〜る牧野出羽同八太史同民
部いし〜今川方あり〜といふとも
成定昂ち是降方の色をときて牛
窪小坂井の両砦よ

神君の勢を引入れしに上羽を
さしめ渥美郡吉田城より
神君教令を施され長濱(長濱城)
ありしをり年を歴て稻垣長茂
も長家人より列す 國朝大業廣記

一 牧野成定

大権現より属したるもつと
牧野守右衛門若瀬治部同掃部山

本常刀ありしひし長茂等五人の
者作に依て長茂系のみあらはし
ありて岡崎にて宅地をたまた
りてつとく 寛永信

一 永祿九年十月牧野右馬允成定
死して其嫡子新次郎康成遠跡
をつと時より山中市左衛門と長茂
り父重宗とより保七郎右衛門を以

て言上しけり康成幼少して我
等年老たりぬるつゝの最前よ
百出されし五人のうち一人を
康成よつけさせたまふといふ事
る

東照公是を聞て居ゆり
あけられぬ別ち長茂一人康成よ
あつて牛窪に帰して住す

近代諸士傳畧

一天正四年八月

大権現遠門飯沼原へ居出陣のとき
松平甚太席をらひし右馬允康成
作に依て苗守番を勤む長茂是
よ志つて同十年三月より
さして勤番す同年駿門をたいら
け給ふしよ康成作をわら

ありて駿河興國寺の城を守護す長
茂是に属す 寛永備

一 信長明智のためは生害のとき

権現様の古田守駿河三枚橋より松
平周防也 基太郎
後見多 興國寺より牧野右馬
允ありひより稲垣平右衛門清水に
中多伝右衛門左城にけりる上方
の久安を聞て周防も伝右衛門よ

里牧野方へ集りけ小藝を以て水
條の歌をも清ん事いふありて城を
一つよつほみ押へんやと評議す
牧野より稲垣平右衛門にけりい
若の評議能くかす信長は爰
いさし小條へゆえさる月になや三
城より一つよつほまふそれをもあ
よして何れらの手たてさせん

もまのり糺し一是二つあり又地
下人集言のよらめと見裏かゝる人
まゝ是二つあり上言より急度忠
志らせ忠臣もなきうちよ大愛
よ字怖し一城と明け給らんや
是二つ以上二つの損あれい貴命
のまゝよ左様一其月よ小田原
より押かけの其ときこそ忠死の

期とや入るありとらめける若
同公せしめ畢ぬ果して小田原
よりも手出しあり安堵よ左様
せしあり

續武家閑話

一 牧野右馬允所に伊賀田賀のあ
ふれものとも郎者修行と號して
興國寺よ居てける信長生害の
沙汰聞えければ彼等耳畔とてい

もまのり難く是一つあり又地
下人集方のみよらめと見裏かへり
きつ是一つあり上の方より急度出
志らせ信長もあきらむちよる愛
よ字怖く二城を明け給らんや
是二つ以上二つの損あれの貴命
のまのり左城一其月よ小田原
より押かけの其ときこそ忠死の

期と申すありと申すありける若
同公せしめ畢ぬ果して小田原
よりも手出さる安堵よ左城
せしあり

續武家閑話

天正十年六月廿七日

野右馬允祈に伊賀田賀のあ
ふれものども即者修行と號して
興國寺に居てける信長は害の
沙汰聞えければ彼等耳聾とい

わ〜色め〜群と稲垣平右衛門
見付て右馬元よ〜てけ〜
らす彼等よ〜とまを揚り〜て
〜とりの牧野聞てけ言〜人
人の多も〜とそたのむ〜如何と
あ〜けれの稲垣〜先んす
〜人〜制す〜人の侍
〜彼等〜風情た〜見届か〜

〜の方より早〜と〜場
〜素子も公元〜存す〜
間早く左新〜か〜あ〜彼
等も〜と〜と〜いよ
〜とらせ路傍等も〜と沙汰
〜與も何さ〜も今度の儀あれは
苗〜て先達〜も見届〜と
〜と〜と〜と〜と〜と

上江

源君上方より湯中向より来りてあ
り一属忠告を仕りて其旨を誓祠
せしめて帰しけりて其御より入
るもめと苗より却て諸人の機を
失ひ惑はらるる一いつく早く機
を知りてゆりてそのとらぬまあり

若橋
舊記

聞書

一天正十年七月

大権現甲門新府より小條氏と
長對陣のとき相門のときと
て足守山の麓にをりて天神川
の古城をこころらへ長茂をたす
て是を守りしむる事数月の後
股羽中藏作より依りて長茂より
て是を守りしむる事康茂あり

よ久野三郎左衛門右衛門守命をうけたま
りて夏門松戸の砦を守りて
山のさきへとある長茂住て康成
に属す同き十一月小條和をこころ
て帰陣す

大権現後門長久保の城を築き
たまひ長茂よ命りてまもらし
めたまひ長茂松戸より長久保

にいらりて是を守り翌年十月右
の城を康成にたまふ

寛永藩

一 小田原城攻めとき延曲輪の仕寄場
あゝ味方の兵多々鉄炮に中
甲けきり

神君栖樓より御覧し稻垣平
右衛門長茂に作付られ仕寄を
堅くしけるを諸陣皆そのこと

くよ仕考をつけりれり手厚も少
あ〜か〜りよけりこの曲輪への牧
野右馬允康成松平周防も康重西
人を作付られけりよ康成寄り口
を井俣並改よ作付らる康成公よ
掛りひ之居たりけり合号の
鐘鳴けりしとき皆攻入けり福植
長茂の康成の家占ありけり別

の作よて手勢百んかりよてつ
きて攻入る月に橋ありけりよ並
改も橋をかけたきと思ひけり
長茂仕考場より船板を取考せ
橋に渡り橋の水を海へ切落し
たれ味方公安へ往来しけり
長茂の鬚多かりけり長鬚と
百〜てこの功をも康成のあけり

武徳大成記

一 小田原陣のとき、牧野右馬允ら、
稲直平右衛門、右船をよめよせ
釘を抜きかすくひを放ちてそ
きくよ分て一町よ取てまゝ人
ごきよ見てもいゝあゝ志の事
かゝりよ、並曲輪をのりよと
まゝ右の船板を橋よ渡して釘校

をうちつけよ、自由よ渡り
のりよ、人皆其功者よ感す

功
雑
記